「七重巻き髪筋の一重巻き成るきャがめ」
―鬼虎の娘のアーグに見る宮古島女性の祈り―

栗　原　　健

1　はじめに

沖縄諸島の最西端に位置する国境の島・与那国島の歴史については、史料が乏しいため不明確な部分が多い。1500年頃に島を支配したとされる女性首長サンアイ・イソバの物語のように、豊かな伝承が存在するにもかかわらず実像が定かでないケースもあり、もどかしい限りである。そうした中で、一般に史実として受け入れられて来た出来事が、宮古島頭職の仲宗根豊見親玄雅による鬼虎討伐である。

与那国島の首長であった巨漢の鬼虎は、島の地の利や自己の武勇を頼みとして、王府の命に背くようになった。このため首里の尚真王は仲宗根豊見親に鬼虎を倒すことを命じ、彼は自らの息子・仲屋金盛を含む24名の猛者と4名の祝女と共に与那国へ向かう。策を用いて鬼虎に近づいた彼らは、激しい闘いの末に敵を斬り倒し、鬼虎の娘を捕虜として宮古島に凱旋した[1]。嘉靖年間初め（1522年）頃の出来事と見られるが、石垣島におけるオケヤアカハチの乱平定（1500年）に引き続き、王府による八重山支配確立の流れの中で起きたドラマである。この与那国攻めについては、仲宗根の子孫によって編まれた『忠導氏家譜』（1757年）に詳述されており、鬼虎の最期を歌った戦いの歌謡も残されている（ただし近年では、同家譜の記述には不自然な点があることが指摘されており、遠征の史実性を疑う声も挙がっている[2]）。

この鬼虎の死が語られる際に必ず並んで取り上げられるのが、宮古島に連れ去られた鬼虎の娘の悲劇である。虜囚となった彼女は、水汲みなどの重労働を課せられて虐待された

---

[1]「忠導氏家譜」における鬼虎征伐の記事は、以下に引用されている。原田信之「沖縄・与那国島の鬼虎伝説」『新見公立短期大学紀要』第29巻、2008年、251-252頁。慶世村恒任著『宮古史伝』中の記述はこうした史料に基づいている。慶世村恒任『新版　宮古史伝』冨山房インターナショナル、2008年、114-117頁。稲村賢敦は、仲宗根豊見親玄雅の政治的功績の中に与那国入りを位置付けて説明している。稲村賢敷『宮古島庶民史』三一書房、1972年、222-231頁。

[2] 例えば、下地利幸「『与那国の鬼虎征罰』年代考～鬼虎征罰『嘉靖元年（1522年）』説の来由を考える～」宮古島市総合博物館紀要第17号、2013年、41-57頁。下地はこの中で、鬼虎成敗の物語が酒呑童子退治の物語とパラレルになっていることを指摘する（51-52頁）。島村幸一は、「史実として宮古島勢力の与那国島進出はあったのかもしれない」と慎重な姿勢を示しつつも、「『嘉靖年間』の玄雅等の鬼虎『征罰』は、あくまでも説話的な記事と理解すべきではないかと考える」と述べる。島村幸一「宮古島の士族『忠導氏仲宗根家』の家譜叙述：『八重山征伐』をめぐる悲劇譚と『征服』譚」『沖縄文化研究』第47巻、2020年、30頁。

末に、袖山の地で故郷を慕いながら絶命したとされる。彼女の嘆きを歌った哀歌は『雍正旧記』（1727 年）に書き留められ、明治時代に至るまで広く宮古島の人々に歌い継がれて来た。

考えてみれば不思議なことである。与那国の娘の苦難を歌った歌謡が、なぜそのように宮古島の人々の心を深く捉えたのであろうか。先祖たちが責め苛んで死に追いやったとされる者の悲しみを、その子孫たちが自らのことのように歌った背景には、何らかの理由があった筈である。この歌のどのような側面が島の住民、とりわけ女性たちの心に響いたのだろうか。本論では、沖縄地域に広く伝わる継子話の語りや水汲みの労苦に注目することにより、哀歌に映されている女性たちの苦難を浮き彫りにする。同時に、山中の樹上で息絶えたとされる娘の壮絶な姿に、人々の声無き声を受けとめて祈り上げる巫女の姿をも読み取りたい。

2　鬼虎の娘のアーグ

鬼虎の娘を描いた歌は、宮古島歌謡のジャンルでは「アーグ（アヤグ）」と呼ばれるものである。「綾言」「綾語」と書かれることもあるが、「綾なる（美しき）言葉」の意とされる。娘の歌は 2 種類のものが知られており、両者のテキスト・訳については伊波普猷著『古琉球』（1911 年、改訂版 1942 年）、慶世村恒任著『宮古史伝』（1927 年）、外間守善・新里幸昭編『南島歌謡大成Ⅲ　宮古篇』（1978 年）、新里幸昭著『宮古の歌謡』（2003 年）に掲載されている[3]。引用が長くなるが、ここでは新里の『宮古の歌謡』から 2 つの歌のテキストを引用し、短くその大意を添えたい。

1 つ目の歌「同人（仲宗根豊見親）八重山入之時嫡子仲屋の金盛豊見親捕参り候女のあやこ　但鬼とらか娘」は、『雍正旧記』に記されているものである。

耳すきかや漲水
肝す思たおやさけ
中屋主か美御ほけん
やこめ親の美御ほけん
漲水むあは見て
おやさけむあは見て
志良か川と通ひおり
寄合川と通ひおり

[3] 伊波普猷『古琉球』岩波書店、第 10 刷、2025 年、273-284 頁；慶世村、288-295 頁；外間守善・新里幸昭編『南島歌謡大成Ⅲ　宮古篇』角川書店、1978 年、299-301 頁；新里幸昭『宮古の歌謡付・宮古歌謡語辞典』、沖縄タイムス社、2003 年、179-187 頁。

白明川やむまやる
寄合川やあほやと
すともての川おれ
明けさるの川おり
ね間座を越んな
外間座う越んな
あはなけはつはふむ
いちよふけは泪おて
あか八重山んおりんな
下八重山んおりんな
あめにやちよむめやめぬ
露にやちよむめやめぬ
あたりことやたはり
かなさことやたはかり
川んかいはりりおり
水汲かそかりおれ
豊見親の御ほけん
やこめ親の美御ほけん
戻すふいる豊見親
帰すふいるやこめ親[4]

主たる意味としては以下のようになる。音に聞く漲水の港、親崎の港を、仲屋主（自分を捕えた仲屋金盛）のお陰で私は見ている。そこで私は寄合の井戸、白明の井戸に明け方から通い、水を汲みに下りて行く。根間座を越える時、外間座を越える時、苦しさのあまり顔を上げれば唾をのみ込んでむせび泣き、下を向けば涙がこぼれ落ちる。私が八重山、与那国にいた時には、雨にも濡れず露に濡れることなく、「大切な子（あたりこ）だ」「愛しい子（かなさこ）だ」と可愛がられていたのに、今はこうして井戸に水を汲みに行くのだ。豊見親、どうぞ私を故郷に戻して下さい、帰して下さい。

2つ目の歌「可憐なる鬼虎の娘を歌ひしアヤゴ」は、明治41年に伊波普猷が友人の富盛寛卓から受け取った歌謡であり、富盛の妻が歌った詞を筆記したものである。35節まであるため、ここでは冒頭の1-10節を省略して歌詞を紹介する。

（私が八重山に要る時には、乳母や守姉が付き添う身分であったが、大親主に「妻にし

[4] 新里、180-181頁。

てあげよう」と騙されて漲水、親崎に来てしまった。だが大親主には妻がおり、彼は妻に向かって「八重山の下女を探して来たぞ、試してみるがよい」と言った）

「はいよはい　八重山下司
此のパヅん　水満てる」
七重巻き髪筋の
一重巻き成るきャがめ
白明川ゆ　下り汲みャむ
寄合川ゆ　下りふみャむ
満てばなの　無んにば
端よりの　無んにば
夜占瀬ゆ越えるんな
刀刃ゆこえだけ
外間座ゆこえるんな
大溝ゆこえだけ
藍屋川ゆ下りちから
母の屋ゆ行くだけ
「はいよはい　細工の小父達
此のパズん　底入れふイさまち」
南宗根の住屋立の
小父主が　おぼけんど
水や水　満てたりャ
端ゆらし　満てたりャ
「ふみど来す　おやむま
満てど来す　あむさり」
「汝が家ゆ探み去れ
んにャ帰り八重山下司」
漲水のなげがとう
ぱなむつのなけがとう
泣きな泣き　歩けばど
よむなよみ　行けばど
舟がまの着き居りば
ミスがまの着き居りば
「はいよはい　池間の兄達
其の舟ん乗せふイる」
「此の舟や　あかうた

女乗す船や有らぬ
彼所からど　あかうた
女乗す船や来す」
「はいよはい　池間の姉達
其の船んのうせふイる」
「此の船あ　あかうた
親姉のうす船や有らぬ」
海浜ば踏み行き
ぱなむつば辿り行き
袖山の大木が
高木が末ぱなん
我んが家ゆ見上げればど
我が八重山見上げればど
ばんが家のおもかげの
真面にャん立ち居れば
涙とゝめ　起たなしど
よむとゝめ　起たなしど[5]

大意はこうである。女主人に「この桶に水を満たすように」と命じられたが、（桶には底が無いから）いくら水を汲んでも満たせるわけがない。夜占瀬を越えて行く時には刃の上を渡るように辛く、外間座を越えて行く時には大溝を渡るように辛い。ようやく南宗根の職人に頼んで桶に底をつけてもらったので、水を満たすことが出来た。帰って女主人に「水を満たしました」と言うと、「家を探して帰れ」と暇を出された。泣き濡れたまま港のほうへ歩いて行くと、池間の男たちの船があるので、「乗せて下さい」と頼んだが、「女を乗せる船ではない」と断られた。池間の女たちの船も乗せてくれない。海辺を進み行き、袖山の大きな樹に登って八重山のほうを眺めれば、故郷の家の面影が眼前に浮かぶようだ。涙と共に起き上がることが出来なくなり、悲しみと共に起つことが出来なくなった。

伊波が富盛から受け取った情報によると、歌はこの後も続いて行き、面影の家の中では母が縫物をしている、機織りをしていた姉が、「妹よ、早く帰って来て手伝っておくれ」と言うので手を伸ばしたが…といった文言があったのだという。おそらく、伸ばした手の先には何も無く、空しく幻から醒めてしまうのであろう。最終的に、娘は虐待の末に樹上で餓死したとの伝承を伊波は記す[6]。稲村賢敷は「袖山嶺で縊死したと伝えられている」

[5] 新里、183-187 頁。
[6] 伊波、282 頁。

と記すが、樹上で息絶えたとなれば、確かに首を吊ったと考えることも出来よう[7]。どちらの歌も救いの無い哀切極まる内容であるが、こうしたアーグを島の女性たちは歌い継いでいたのである。

なお、この２つの歌謡の他に、鬼虎の出身地ともされている宮古島の狩俣では、「尻に穴があいた桶」というクイチャーが伝えられている。内容は、上記２つのアーグの一部を組み合わせたものである。仲屋の主の尻に穴があいた桶、これは七重巻の髪が一重巻きになっても満たすことはできない、外間座も白明井も泥だらけだ、私が八重山にいる時は親の子、主の子であったのに…と歌われるが、女主人や港でのやり取り、樹上での嘆きは登場しない[8]。アーグを聴き知った狩俣の人が、記憶していた部分のみを歌って伝えたものであろうか。人々がこの歌に示した関心が読み取れる。

３ 「継子話」とのつながり

上記２つのアーグのうち、より物語性に富んでいるのは後者の「可憐なる鬼虎の娘を歌ひしアヤゴ」であろう。娘は、底の無い桶を水で汲たすという嫌がらせを受けた挙句、おそらく何も持たずに家から追い出され（解放されたにもかかわらず泣き続けているのは、嬉し泣きには見えない）、船に乗ることも許されないなど、理不尽な仕打ちを受け続けて行く。

水汲みについては、歌を見る限りは娘は桶を持たされたように見えるが、慶世村恒任は、「大桶の底を打ち抜き、それをハサマ浜の砂地に据付けて水をくみ入れさせたのである。白明川からハサマ浜までは約二十五、六町程ある」と記している。このほうがより陰惨な印象が強い[9]。しかも、道では人々が水を運ぶ彼女に石を投げて苛んだという[10]。下地和宏はこのアーグの内容について、「何故にここまでひどい仕打ちをする必要があったのか。宮古にとって鬼虎の存在は何であったのか。いくら捕虜とはいえ、娘にどのような係わりがあるのか」と憤慨しているが、心ある読者にとっては、そのような感想を持つのが自然であろう[11]。

しかしながらここで注意したい点は、「底無しの桶に水を汲ませる」という陰湿なイ

---

[7] 稲村、227 頁。谷川健一も、おそらく稲村の書から知識を得て同様に書いている。「与那国と宮古の歴史伝承の影に」『谷川健一全集』第６巻、冨山房インターナショナル、2007 年、474 頁。原田信之もこのアーグの末尾について、「大木の上に登って故郷の方向を見やり自殺をとげた様子が描かれている」と述べる。原田、257 頁。

[8] 外間・新里、344-345 頁。

[9] 確かに、運ぶ桶に穴があいておれば、水を運ぶ労苦自体が意味をなさないことになってしまう。ただし、「浜に据えつけられた」との設定では、「この桶を直して下さい」と職人に頼むくだりが不自然になるのではないだろうか。浜から大桶を持参するわけにはいかないし、虜囚の身で職人を浜に招くことは難しいであろう。

[10] 慶世村、295 頁。

メージは、沖縄地域で広く語られている「継子話」のモチーフの１つであることである。鬼虎の娘の歌は史実そのままの伝承ではなく、『雍正旧記』に記されている水汲みの娘の古謡に、継子話的な物語的要素が加わって成立した口承文芸であるとの可能性を考えることが出来る。

継母による継子の虐待を描いた「継子話」は日本全国に見られるが、とりわけ沖縄諸島では数が多く、安里和子によれば沖縄本島では実に 64 種、宮古地域でも 8 種の話を挙げることが出来る[12]。実際、沖縄の多くの民話集をひもとけば、継子話がすぐに目につくであろう[13]。とりわけ「継子の麦つき」「からすと弁当」「継子と二十日月」「手なし娘」などがよく知られているが、こうした中に数としては多くないものの、底が無い桶に水を汲ませる「継子の水汲み」譚も登場する。宮古島のものではないが、読谷村の瀬名波では下のような話が伝えられている。

［注：日本語訳］昔、これは（継親が）継子をいじめるためにいいつけた仕事のことだがね、「お前は、今日はこのつるべで、この桶に水を汲み入れなさい」と言った。それがそのつるべは底のないものでね、水桶には底はあったのだけど、親のいいつけだものと言って、つるべを井戸に落としては汲み、落としては汲みして、わずかにそれからしたたる分で、水桶を満たしたそうだよ。

「これで水は汲みました。水桶を満たしました。」と、親に言うと、「それでよい。今度はね、もう一度水を汲みなさい。」と言いつけた。このときは、水桶の底は抜いて、つるべには底を入れて水を汲ませたら、一日中汲んでも、幾度やっても水桶の底にはまるっきりたまらなかったそうだ。　　屋良朝助（明治 40 年生）[14]

沖縄市でも下のような話が語られていた。

---

[11] 下地和宏「仲宗根豊見親と鬼虎（うんとら）～与那国攻入りの年代について」『宮古島市総合博物館紀要』第 14 号、2010 年、15 頁。

[12] 沖縄の継子話の一覧については以下を参照。安里和子「沖縄に伝わる『継子話』の種々相について」『ゆがたい―宮古島の民話』第 4 集、宮古民話の会、1984 年、284-288 頁。

[13] たとえば『長浜の民話』には、「継子と二葉草」「カラスと弁当」「継子と麦搗き」「継子と二十日月」「継子とこやしはこび」「継子の油ゆで」「継子話」「継親念仏」が収録されている。沖縄県読谷村教育委員会/歴史民俗資料館編『読谷村民話資料集 3　長浜の民話』沖縄県読谷村教育委員会、1981 年、106-125 頁；『宜野座の民話』では、「手なし娘」「継子の麦つき」「継子と二十日月」「継子と竹の子」「カラスと弁当」「継子の井戸掘り」「継子と二葉草」「継子とチンヌク」「継子の墓通い」が見られる。宜野座村教育委員会編『宜野座の民話　昔話編』宜野座村教育委員会、1985 年、240-258 頁。

[14] 沖縄県読谷村教育委員会/歴史民俗資料館『読谷村民話資料集 4　瀬名波の民話』沖縄県読谷村教育委員会、1982 年、111-112 頁。

自分の子どもには水汲んで来なさいといったらターグ（桶）水かかるものに持たしてね、継子にはバーギ、水の入らんの持たしてね。そしたらもう、いくらあれ（水を汲もうと）しても水かからん（汲むことができない）さあねえ。また、叩かれたり、叱られたりや。そういうような継子と自分の子どもは差をつけて、出来ないことをさせて、無理に叱るという、昔の人はしよったって。　（新屋ヨシ子、大正８年生、越来）[15]

（略）「これ（穴のあいたツボ）に水を入れなさい」といって。だー底がないから、なんぼ入れても担いでいって入れてもいっぱいにならないさーね。だから、もう四苦八苦して考え込んでいるところを、なにか知恵のある人が、神かわからないけろ、こう「海のとこに行って、このカメ、壺持って行ってこのまま置いたら一杯溢れんばかりの水があれする。これで、もうできあがり」といって教えたってよ。いろいろ昔の人もいろいろしよったってよ。　（知花ツル　大正５年生、嘉間良）[16]

この他、ハジマキ（はぜ）の木に悪い霊気がこもるようになったのは、底が抜けた桶で海水を汲まされた継子の嘆きがこもっているから、との伝承も記録されている[17]。

同様の無理難題を課せられて悩む継子の話は、沖縄のものだけではない。日本版シンデレラとも言える全国的な昔話「米福粟福」でも、継母が継子と実子を山に栗拾いへ送り出すが、実子には普通の袋、継子には破れた袋を持たせたため、継子は栗を集めることが出来ずに難渋する。底の無い桶とパラレルになっていることは確かであろう。

継子話が日本人に好まれて来た理由として黄地百合子は、「米福糠福」のストーリーをもとに、継子が山姥などの助けを得て難題を克服し最終的に幸運をつかむという展開に、通過儀礼的な側面を読み取る。継母のいじめは母性の否定的な面を現しており、継子が虐待と対峙してこれを乗り越えるのは、実母から心理的独立を達成するまでの内的成長を表すプロセスと説明出来るのである[18]。沖縄の継子話は、継子が幸せになるまでを描いた長い話もあるが、当座の不幸を乗り越えたり、継母が自ら仕掛けた罠にはまるだけの短い話が多く、通過儀礼的な側面まで読み込むことは難しいように見える（まして鬼虎の娘の場合は、親切な職人の助けを得て難題は克服したものの、その後の救済は無い）[19]。にもか

---

[15] 沖縄市郷土博物館編『沖縄市の伝承をたずねて　本格昔話編　沖縄市文化財調査報告書第38集』沖縄市教育委員会、2010年、207頁。

[16] 同上、208頁。

[17] 同上、207頁。

[18] 黄地百合子「継子譚に潜むもの―昔話『米埋糠埋』と『米福粟福』をめぐって―」『日本の継子話の深層』黄地百合子著、三弥井書店、2005年、109-128頁。

[19] ただし安里は、出世で終わらない沖縄の継子話も、「もともとは成人儀礼などの難題などから発生し、成長したものと考えられないだろうか」と述べている。安里、280頁。

かわらずこうした話が広く沖縄で語り伝えられたことは、継子話に描かれている苦難が、若い女性たちの痛みと重なる面があったためであろう。

遠藤庄治は、国頭地方で民話の聞き取りを行った際、笑い話を語る時には陽気に話していた老婆たちが、「継子話」を離す時には「涙を流しながら語りに詰まってしまったり」、継子話をお願いしても、「それを聞いただけで涙になってしまって、もうそんなことを聞いてくれるな、というふうにいう年寄りが大変多い」と指摘している。その理由は、継子話に出て来る「お母さんが鳥になって、私を助けてくれた」といった歌を、彼女たちは少女の頃、金持ちの家で子守女として奉公しながら歌っていた、そうした苦労が思い出されるからだと遠藤は述べる。

> （略）あずけられている家は、その家の主人がどんなにやさしい人たちであったとしても、しょせんは、やはりその家族の中では泣けない、そういう家であって、だから、いうならまま子に対する共感の気持ちいうふうなものは、子守たちの中にはあったわけですね[20]。

このように、奉公に出て他家に住む寂しさと孤独感、故郷や母を恋い慕う思い、そうした涙を抑圧しなければならなかった痛みを表現する際に用いられたのが、継子話の語りであったことになる。我が事として語るにあまりに辛い思い、表に出すことがはばかられる心の叫びは、物語にのせて語る・歌うことによって解放することが出来たのである。

この点を考えると、1つ目のアーグに登場する、家では「大切な子、愛する子と言われていたのに」と嘆く言葉が非常にリアルなものとなって聴く者に迫って来る。鬼虎の娘が終始涙にむせび、味方がいない孤独にさらされているのも、それは多くの女性たちが体験して来た悲哀を一身に映して形作られたイメージだからであろう。沖縄の継子話人気については村芝居の影響なども指摘されているが、そうした芝居が多くの人々に受け入れられた背景には、まず女性たちの現実の体験が存在したのである[21]。

4　水汲みの苦労

鬼虎の娘を歌った2つのアーグのどちらを見ても、前面に押し出されているのは水汲みの苦労である。歌には具体的な地名が挙げられており、島の女性たちが日々引き受けなくてはならなかった労働の姿が、実にストレートに描かれている。

琉球石灰岩に覆われた宮古島は、降水量は豊かであるものの、地質が保水性に乏しいため雨水の多くは地下に吸い込まれてしまう。地下ダムが建造された現在は、地下水を汲み

---

[20] 遠藤庄治「『かさじぞう』を考える―昔話研究の立場から―」『遠藤庄治著作集　第1巻　沖縄の民話研究』遠藤庄治著、沖縄伝承話資料センター、2010年、145-146頁。

上げて存分に利用することが可能となっているが、かつては洞窟などからしみ出す湧き水を求めて井泉を掘り下げなくてはならず、生活水を得ることは難儀なことであった。

「尻に穴があいた桶」のクイチャーが歌われていた狩俣も水に乏しい地域であり、同地に伝わる神歌の古謡には、狩俣の始祖神が良い水を求めて地域を歩き回り、ようやく飲める水を得て定住するさまを歌ったものがある。山口晴幸が指摘するように、こうした始祖の物語には「豊富で良質な水を求め定住地を捜し歩く先人達の姿を垣間見ることができる」のである[22]。宮古島を含めて沖縄各地で見られる、「水に濡れた動物が現れたために、井戸となる水を見出すことが出来た」とする伝承も、水を得ることは人間の知恵だけでは難しく、自然界や超自然的存在からの助けを必要とするとの感覚を示すものであろう。

宮古島の井戸と言えば、「洞井（ウリガー）」と呼ばれる大規模なものが思い浮かぶ。陥没ドリーネと呼ばれる窪地の底にある湧き水を求めて洞窟を深く掘り下げ、地底部に下るための石段を造った「降り井戸」であり、平良市の盛加井、城辺町の友利あま井などがよく知られている。盛加井の場合、入口から湧水口までの高低差は実に 20 メートル、曲折した 103 段の石段を下りて行かなくてはならない。底部に至れば、陽光もあまり届かず昼なお暗い。洞上を見上げると、地上に生い茂るガジュマルの枝などが木漏れ日の中で輝いており、「ラピュタスポット」と観光客に呼ばれる美しい光景を眺めることが出来る。しかしそこで気がつくのが、底部に続く石段の表面が磨滅してくぼんでいることである。かつて重い水を抱えながら上り下りしていた、島の女性たちが残した生々しい痕跡である。

岡本恵昭が記すように、「島の女性の生涯の半分以上の歴史は、水汲みの日課で始まり、水汲みで終わっていった。女の一日は、未明のアキゾラに水を汲みに往来し、食事をつくり、主人の手水を使わすことであった」のである（人頭税時代には、税が課した労働がこれに加わる）[23]。頭に巻いた布の上に桶か壺を載せて頭上運搬するのが、一般的な水運びのやり方であった[24]。島民の窮状に同情的であった沖縄県令の上杉茂憲は 1882 年、

---

[21] 安里は、「継子話においては、四、五人の話者も強調しているように、特に芝居の影響を強く受けたようである。『継子話』は最も大衆受けする演目だったであろうから。」と述べているが、そもそもそれだけ人で気を博する理由があったと考えるべきである。安里、273 頁。なお、これは沖縄に限ったことではなかったようであり、稲田浩二も昔話収集の際、「継子話」を語ってくれるよう頼むと、「かなりの語り手が逡巡する」と述べている。「私の村にはそんなひどい人はいないんだ」というのが彼らが口にする理由であるが、他の昔話を皆で語って行くうちに、次第に「昔話を語るという文芸的な世界の中に自分が身を置いているから語れる」ようになるという。昔話として自己の体験と距離を置くことが出来てはじめて語る気持ちになれるのであろう。それだけ継子話は人の内面に結びついた存在であったことになる。小沢俊夫『日本人と民話』ぎょうせい、第 3 版、1980 年、150 頁。

[22] 山口晴幸「自然科学紀行古水史跡編（11）」『水利科学』第 52 巻 4 号、2008 年、87 頁。

[23] 岡本恵昭『宮古島の信仰と祭祀』第一書房、2011 年、225 頁。

[24] 同上、225 頁。

宮古島での水汲みについて、「徐々歩ヲ移シ洞底ニ達シ一小桶ニ水ヲ満テ漸ク是ヲ頭上ニ載セ汗全身ヲ湿シ再ヒ其峻阪ヲ攀チ而シテ又数町ノ処ニ運搬ス其辛其苦愍察セサルヘケンヤ」と報告に記しており、当時の感覚から見ても過酷なものであったことがうかがえる[25]。

この重労働の厳しさが、鬼虎の娘のアーグの中心的なモチーフとなっている。1つ目の歌においては、「白明川やむまやる　寄合川やあほやと　すともての川おれ　明けさるの川おり」と井戸の名前（「川」は井戸のことである）が挙げられるが、この箇所は新里の訳では「白明川は崖穴である　寄合川は洞窟である　早朝の井泉下り　夜明けの井泉下り」とされている[26]。高低差が大きい洞井から水を運び上げなくてはならない苦労を映した言葉であるが、早朝に井戸の闇に下りて行くことは、それ自体危険な行為であった。酒井卯作は、宮古の多良間島での井戸降りについて、暗い間は降り口で「ピツゥ（人）」と呼びかけ、返事が無ければ後ろ向きになって手探りで地下に下って行ったという[27]。転がり落ちないためであるが、こうした事情は宮古島でも同様であったろう。友利あま井を訪ねた山口晴幸は、約100段の石段だけでなく、石段沿いの洞窟壁も表面が磨滅していると報告している[28]。暗がりを手探りで上り下りしていた女性の手が、石をもすり減らしたのである。

ようやく地上に戻った女性は、ここから水を頭上に載せて、家までの長い道のりを歩かねばならない。根間座・外間座（平良東仲宗根の外間御嶽であろう。因縁深い仲屋金盛の墓と言われている）にさしかかる時には、上を仰いでは唾を飲み込み、下を向けば涙が流れると歌われているが、その辺りで身体が痛み始めるからであろう。2つ目のアーグでは、「ユウラジ［注：夜占瀬］を越える時には刃の上を越すよう（に辛い）、外間座を越える時には大溝を越すよう（に辛い）」と歌われる[29]。剣の刃が突き刺さるように足が痛み、大きな川を渡るようにあえいで息が詰まるという意であろうか。文学的な表現となっているが、苦痛をダイレクトに想像させる言い方であり、運ぶ者の体の震えが伝わって来るようである[30]。

この苦しみが集約されている一節が、歌の前半に登場する「七重巻き髪筋の　一重巻き

---

[25] この文は山口、88頁に引用されているが、元は『宮古風土記』下巻に引用されているものである。

[26] 新里、180頁。

[27] 酒井卯作『琉球列島における死霊祭祀の構造』第一書房、1987年、400頁。最初に呼びかけるのは、途中ですれ違う余地が無いためであろう。

[28] 山口、92頁。

[29] 新里、185頁。

[30] 次節の「藍屋川ゆ下りちから 母（うま）の屋ゆ行くだけ」について、新里は「藍屋井を下りてからは 厩に行くよう（に辛い）」としており、伊波も「厩」と訳しているが、厩に行くことがなぜ辛いのかは定かではない。『新版 宮古史伝』では「（そして距離の近い）藍屋川を汲んだら（実に）慈母の家を訪ねる程に（嬉しい）」と訳されており、文意は明確になっている。しかしながら、今ひとつ釈然としないものがある。慶世村、292頁。

成るきャがめ」である（「七重巻きの黒髪が一重になるまで」と訳される）[31]。稲村賢敷はこれを、「日夜の労役に堪えずして、丈なす黒髪も乱れ落ちて取り繕う隙もなく」と解したようであるが[32]、これは明らかに「髪を整える暇もない」といった身だしなみの話ではない。七重に巻くほど豊かにあった髪が、重い水桶を毎日頭上運搬し続けた結果、一重巻きにしか出来ぬほど減ってしまったという、命を削るやつれぶりを示す言葉なのである。アーグでは、「たとえそうなるまで水を運んだところで」という修辞的な意味合いで用いられているが、こうした強烈な表現が生まれたのは、自らの容色の衰えを嘆く女性たちの悲しみが根底にあるからであろう[33]。ある意味、底の無い桶に延々と水を汲み続けるという設定は、終わることなく続く日々の労苦のイメージから生まれたものかも知れない。

このように2つのアーグは、島の生活の厳しい現実をまざまざと描き出しており、当事者しか語り得ない表現がなされていると言ってよいであろう。「継子話」との関連でも見たように、彼女たちは鬼虎の娘の辛さに自らの体験を重ねながら、この歌を歌っていたと想像することが出来る。

5　樹上の死の意味

アーグの結末部において、鬼虎の娘は山に登って故郷の島を慕い求める。このイメージは、実は他の南島歌謡にも登場する。背景に存在するのは、八重山開拓を進めるために首里の王府によって進められた島民の強制移住政策である。西表島の崎山村は、王府の命令で波照間島などから移住させられた人々によって築かれたが、当時の住民の望郷の叫びを歌った「崎山節」が今も伝えられている。この内容は鬼虎の娘が歌ってもおかしくないものであり、おそらく記録されなかったアーグの末尾の部分には、こうした文言が並んでいたのであろう。喜舎場永珣の『八重山民謡誌』にあるテキストと訳で見たい。

ユクイ頂	憩いの頂上に
遊ビパナ	遊び端に
登ブリヨウリ	登ぼって
波照間ユ	父母の島波照間の

[31] 新里、184頁。

[32] 稲村、227頁

[33] 池間島の「富貴中皿」の歌謡には、豊作を祈願して「みがばうむ　かうチばら　いでぃーきゃ」と歌う言葉があるが、これは「女たちの頭に　荷敷き藁の輪のあとができるまで」浜を栄えさせて下さい、と祈るものである。ここでは、髪に輪の跡がつくほど物が運べることが豊かさと繁栄の象徴とされているが、髪が減ることは言われていない。大竹有子「南島歌謡における身体とその変調に関する表現」『沖縄芸術の科学：沖縄県立芸術大学附属研究所紀要』第21巻、2009年、26頁。

生リ島ユ	産まれ故郷を
見アギリバ	眺めたら
バ家ヌアブ	我が家の母の
産シヤル親ヌ	産みの母親の懐かしい顔を
真面見ルソンネ	真正面から見るような心地がする
見ラディシバ	じっと見つめていると
目涙マリ	涙があふれて
見ラルヌ	見えない
取ラディ　シバ	手を延ばして捕らえようとしたが
遠サヌケ	遠い海の上で
取ラルヌ	届かない
ナクナクトゥ	泣きに泣いて
ユムユムトゥ	しぶしぶと
戻リキ	移民地に戻ってきた[34]

石垣島の野底には、1732年に黒島から強制移住されて来たマーペーと呼ばれる女性に関する伝説が伝えられている。愛する男性と引き裂かれて野底に連れて来られた彼女は、せめて山上から故郷の黒島を眺めようと野底岳に登り、そこで恋人を想いながら遂に石と化したという。高木健が述べているように、こうした石化伝承は、権力者の圧政に対する抵抗を永久化する表現と言えよう[35]。

マーペーの石化が権力者への怒りであったとすれば、鬼虎の娘が樹上で最期を迎えることには、どのような意味を読み取ることが出来るであろうか。

古の大和の世界には、傷ついた女性が樹木に向かって悲しみを注ぐイメージが存在した。『丹後国風土記』逸文には、恩知らずの人間によって追い出された流浪の天女が、槻の木にすがって泣いたために「哭木（なきき）」の地名が生まれたと伝えている。『源氏物語』の浮舟も、「大きなる木の根」で嘆いているところを助けられる[36]。樹木は、行き場

[34] 喜舎場永珣『八重山民謡誌』、沖縄タイムス社、1967年、391-392頁。情報を下さった琉球大学名誉教授の山里純一氏に感謝したい。

[35] 高木健「石化伝説―野底マーペーに見る世界」『八重山文化論集』第2号（創立十周年記念号）、八重山文化研究会、1980年、245頁。なお、先島ほど遠くからではないが、移住させられた島の人々は宮古島にもいた。宮古の長間村は1723年、宮古島北にある大神島の島民72人を移して造られたが、漁業に慣れ親しんで来た人々が畑作に馴染まなかったため開拓が進まず、王府はその後も数百の人々を他所から村に送り込んだ。実態は、マラリアなどの風土病が猖獗を極めて約4割の住民が死亡したため、常に人手不足であったことが原因と見られる。移住民の辛苦を偲ぶことが出来る（下地和宏「長間村敷の移転について考える～長間村創建の地をめぐって～」『宮古島市総合博物館紀要』第22号、2018年、167-184頁）。

の無い女性の嘆きを受けとめて包み込む存在として思い描かれていたのであろうか[37]。しかし、鬼虎の娘の場合は樹木にすがって嗚咽していただけではなく、木の枝に登っている。丹後の天女や浮舟の場合とは、タイプが異なるようである。

ここで考えてみたいのは、奄美大島に流された名越左源太（1820 年～1881 年）が著した『南島雑話』後編で言及されている、ノロの樹上葬の話である。

> 女巫死し去れば、即其尸［しかばね］を櫃に入て樹の上に懸け晒風雨。三年之後石櫃に収て、神（人登）天の古き戒也と云。中古、監官禁之到ては、竊［ひそか］に行之纔［わずか］に三、四村也。巫女只管［ひたすら］伝其戒[38]。

即ち、奄美大島ではノロが死ぬと櫃に入れて樹の枝から下げて風葬し、3 年後に骨を石櫃に納めることによって天に昇らせたというのである。ただしこの風習は相当以前から禁じられており、僅かな場所でしか行われていないが、ノロたちはその戒めを念入りに伝えているとある。名越は、木の枝に 2 本の縄でぶら下げられた箱の絵も描き、「ノロクメのなきがらを樹上に櫃にをさめて掛置事三年、骨洗て後に壺に納め置く」と書き添えている。名越自身が実際に見たものであろうか、それとも島民の話をもとに想像して描いたのであろうか[39]。ノロの風葬についてはその後も語り伝えられていたようであり、決して異常なこととは見られていなかったことが分かる。

同様の習慣が宮古島に存在したのか否かは定かではないが、沖縄本島では樹上葬の報告例が見られる。大宜味村大兼久では、19 世紀前半のこととして、「死者は竹かごに入れて部落から遠く離れた根路銘に近い密林の中に木の枝をつるして風葬にし、三年経って白骨になると石垣で囲った中に投げ入れた」とされている[40]。奄美のノロの話とほとんど変わらないことは、注目すべきであろう。喜如嘉でも、その地域で死者が多く出ることがあれば、「墓の周囲に植えられている大木に、死体を入れたフッターディル［竹籠］をさげてはやく洗骨できるようにしていた」と伝えられているほか、明治に至るまで、幼児が死亡すると遺体をざるに入れて木に下げていたという[41]。酒井が指摘するように、沖縄地域で

---

[36]「樹下で泣く女性」 聖徳大学短期大学部総合文化学科サイト　https://faculty.seitoku.ac.jp/arts-sciences/2015/04/20/132-%E6%A8%B9%E4%B8%8B%E3%81%A7%E6%B3%A3%E3%81%8F%E5%A5%B3%E6%80%A7/　2026 年 2 月 26 日閲覧。

[37] 先に言及した、底の無い桶で水を汲まされた継子の嘆きの霊気がハジマキの木に残った、という沖縄市の伝承が思い出される。

[38] 名越左源太（國分直一・恵良宏校注）『南島雑記 2　幕末奄美民族誌』平凡社、第 2 刷、1996 年、122 頁。

[39] 名越、58-59 頁。

[40] 加藤正春『奄美沖縄の火葬と葬墓制―変容と持続―』榕樹書林、2010 年、213 頁、244-245 頁。

[41] 同上、213 頁、246-247 頁。

語り伝えられている「歌う骸骨」の民話も、実はこうした風習の記憶から来ているのかも知れない[42]。こう考えると、樹上葬はかつて沖縄地域では広く行われていた風習であった可能性がある。

木に遺体を吊るすことには、死体の白骨化を促進するという現実的な要因の他に、どのような意味合いがあるのであろうか。特に、なぜ奄美ではノロを樹上に吊るすことが強調されたのであろうか（ノロたちは「只管」この戒めを伝えていたとある）。酒井は、セジ（霊力）の高いノロなど「精霊の影の濃いものはとくに、穢れ多き地上におくべきではなく、なるべく地上から離れて高い場所に葬ろうとした考えが、樹上葬という形になってあらわれた」と考える[43]。樹上ではなくてもノロの墓は地面より上に築く、土にはつけないといった習わしは沖縄や奄美で報告されている[44]。聖性を帯びているがゆえに、一段天に近い存在とされていたためであろう。

鬼虎の娘がノロであった様子はない。しかしながら彼女は、島の女性たちの苦しみや痛みを一身に投影されることにより、アーグの中では、人々の思いを歌にして祈り上げる巫女のような存在となったのではないだろうか。言葉も尽き果てて樹上で慟哭しながら絶命するイメージは、樹上葬に付されたノロの姿と重なり、彼女にふさわしいものとされたのかも知れない。

6　むすび

以上見て来たように、鬼虎の娘のアーグは単純な歴史史料ではない。「可憐なる鬼虎の娘を歌ひしアヤゴ」で歌われる「底の無い桶」は継子話のモチーフであり、そのストーリーは史実通りのものとは言い難いであろう。にもかかわらずこのアーグが歌い継がれて来たことは、この歌謡の内容が、底無しの桶に水を注ぐような終わりない労働に耐えていた女性たちの心に共鳴するものがあったからであろう。山上で故郷を恋い慕うだけでなく、樹の枝で息絶える娘の姿には、ノロの樹上葬のイメージと相まって、島の人々の哀しみを背負う巫女の姿が重ねられていたのかも知れない。

山下欣一の議論に基づいて島村幸一が詳述しているように、ノロが何らかの事情によって聖性を汚され、その後難船などにより非業の死を遂げるというモチーフが、奄美・沖縄の各地に伝えられている。このモチーフを島村は、仲屋金盛の娘マブナリの伝承にもあてはめる[45]。マブナリはノロではないが、罪人の娘として那覇に送られた後、国王の寵愛を

---

[42] 酒井、16-17 頁。

[43] 同上、23 頁。

[44] 同上、23 頁。

[45] 島村、15-27 頁。山下欣一の議論は「ノロ（奄美）の聖性と死―悲劇の発生」（山下欣一『南島民間神話の研究』、第一書房、2003 年）から。なお、谷川健一もこうした女性たちの悲話について「先島の受難の歴史そのものを思わせ」ると述べている。谷川、481 頁。

受けたものの帰島の途路で難船し、漂着先の島の男に犯されて死を迎えたと伝えられている。権力者のエゴによって翻弄された女性の悲劇であるが、仲屋たちに虐げられた鬼虎の娘の物語もまた、こうした悲話の輪の中に位置づけることが出来るのではないだろうか。この点を考えると、彼女と巫女たち、女性たちの痛みとのつながりは一層深まることになる。

与那国島や久高島で神女たちが営む儀式に心を揺さぶられた石牟礼道子は、あるエッセイの中で、「霊を感じる能力とは、他の生命のかなしさを、理屈なくまるごと感じうる極限的な感受性」であると述べている[46]。鬼虎の娘のアーグは、こうした「生命のかなしさ」を感じ取って歌い上げた、島の祈りのような歌謡と見ることが出来よう。

[46] 石牟礼道子「生き供養」『石牟礼道子全集・不知火』第 6 巻、2006 年、414 頁。